

人間の価値の形成過程について

三木清の思想を手がかりに

伊藤ちぢ代

日本大学大学院総合社会情報研究科

How do We form Human Values?

– A Consideration of Miki Kiyoshi's Philosophy
in Connection with the Concepts of "Environment", "Art" and "Habit" –

ITO Chijyo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In this article, the process in which people form values is considered in connection with the concepts of "Environment", "Act", "Art", and especially "Custom", all of which are main concepts of the philosophy of Kiyoshi Miki (1897-1945). By careful analysis of Miki's philosophical ideas, we will be able to learn how to create a new "type" of person and how to form and realize truly human values in the present historical situation of Japan.

序章 問題設定

人間が生きていくということは現実に存在することそのものである。現代に生きる「私」の思考や行動は何に基づきどのように形成されてきたのか。自分の生きる社会がどのような社会なのかを問う場合、自分を歴史の中に置き入れて、この問題を歴史の観点から考察することが必要である。そこで、私は「私」が生きる「現代」日本と、現代における人間の価値のあり方を問うてみたいと考える。本稿では、三木清(1897-1945)の哲学を取り上げ、三木の「習慣」概念を中心に「環境」「行為」「技術」のキーコンセプトを考察し、そのことによって現代人における価値形成のあり方と過程を分析してみたいと考える。

環境 環境と主体の相互作用

三木哲学で最も基本的な「環境」概念を取り上げる。第1に、三木において「環境」とは何を意味するのかを確定し、第2、「環境」をめぐる「環境と主体との相互規定」の重要な問題を分析する。

1 「環境」とは

「人間と環境とは、人間は環境から働きかけられ逆に人間が環境に働きかけるという関係に立っている。(中略)人間から環境は作られ逆に人間が環境を作るという関係に立っている。」(『哲学入門』全集第7巻、p.10)「社会は我々に働きかけて我々を変革するとともに我々は社会に働きかけて社会を変化する。人間は社会から作られ逆に人間が社会を作るのである。」(p.10)

人間は「自然的環境」と「社会的環境」を作り、人間が「自然的環境」と「社会的環境」に作られることを意味している。三木はこの世界を「環境」と規定している。

「人間は環境を形成することによって自己を形成していく。これが我々の生活の根本的な形式である。形成するとはものを作ることであり、物を作るとは物に形を与えること、その形を変えて新しい形のものにすることである。」(p.10)

自己を形成するために環境は必要不可欠である。人間は自然環境から作られるといった場合、生きる

土地の条件によって分布する動植物、水、太陽、空気の自然の作用を受けて生命を維持し成長発達することができる。また、社会環境からは人間関係や文化、風土、慣習などの社会の作用を受け家庭、地域、社会の組織が作られる。環境を形成するとは、自然の作用も社会の作用も形成的で、それによって規定される人間が逆に環境に作用するということである。人間の環境への関わりは受動的ではなく、能動的である。つまり、主体としての人間は自立した自己として環境に働きかける。

「自己はどこまでも自己から自己を形成していくのであって、そうでなければ自己はない。」(p.11)

自己とは当然「生命」あるものを前提にしている。「生命とは、自己の周囲とも関係を育て上げる力である。」したがって、自己は現在の自己が自己の周囲との関係を育て、どこまでも成長して新しい自己を形成していくのである。一方、現在の自己はその環境条件の中で、独自性を持ち、自律した自己として存在し、はじめて新しい自己を形成することができる。つまり、その時におかれた環境条件において、常に限定されながら自己は、自己の適応を図るのである。人間は生命ある存在として、人間として如何に生きるかを問い生活の中で獲得していく過程が自己を形成することに繋がっている。環境は生命の維持と自己の形成に大きく関わり、人間は環境を形成することによって、自己を形成していく。これが人間の生活の根本的な形式である。人間がひとりではなく、その時におかれた社会という人間と人間の関わりの中で築いていく場を「環境」というのである。

そこで、社会環境において一般的な社会作用である「常識」がどのように働き、個人と社会の関わりの中で、自己形成にどのように影響を及ぼすのか。三木は我々の行為の多くは常識に従って行われているとして、常識の性質を以下のように分析している。

第1は、常識は社会的経験の集積及び結集であり、社会的知識である。常識は日常的・行為的知識である。常識は環境における行為として技術的であり、技術的知識でもある。第2は、常識の通用性は局限されている。しかし、その社会に属される限り誰もが常識をもつことを要求されている。第3は、常識は直接的に自明なものと思われている。しかし、常

識の成り立ちや、その根拠など反省することなく当然の如く認められている。そのために、常識は社会の中で張り巡らされた網のようなもので、その場に生き続けるものである。親から子へ、世代を経ても変わることなく続く社会的習慣である。それは習慣とも言われ、伝統文化にも発展するものがある。

三木は常識の通用性を次のように分析している。

「常識は探求ではなく、むしろ信仰である。常識は実定的なものであり、ある慣習的なものとして直接的な知識である。社会における慣習が法的な強制的な性質を持っている。それは常識が特に行為的知識であること関係しており、常識は個人に対しては一つの社会的統制力として働く。非常識であることは、無知を意味するのみでなく、社会的悪とも考えられるのである。」(p.34-35)

常識は慣習としてその社会に所属する個人に対して強制力を持っている。その常識に従わないことは、その社会から社会的制裁を受け取ることになる。一度非常識となると、社会的に悪としてその社会に存在していることさえ否定されることになる。その非常識の内容が、他の社会や世界の中では人間の尊厳として認められ、尊重されてもである。人間と環境の相互の関わりは社会環境の均衡と矛盾の状態が如何ように変化しても、変わることはない。「環境」が社会変動している時も、「環境」のあり様や関わりの中で人間は日常的に行う行為を通して自己が問われ、自己を見つめる機会となると考えられる。社会的に常識が強制された場合、自己の内と外に矛盾が生じ、現実の自己と変化してあるべき未来の自己の間に葛藤が生じる。常識が自己形成に及ぼす影響は大きいのである。

三木哲学における「環境」の重要性は自己形成と環境形成の相即性に見出すことができる。この関係において強調すべきことは、自己が「歴史的社会的環境」の中であって、能動的に環境に働きかけることが重要であるという点である。この働きかけは、現在の自己が「表現」されることである。「表現」された自己であるからこそ、「環境」からの働きかけによって新しい自己に変化することができる。「表現」するとは自己の内を外に表すことであり、内と外は一致した「表現」がなされてはじめて新しい自己を

形成することができる。また、新しい環境を形成することができるのである。もし、自己が表現されないとしたら、社会と個人の間には均衡が保てているのかどうかはかることは困難である。自己の形成は環境の形成を離れては考えることができない。この点を三木は、「環境」、特に「歴史的社会的環境」において問題と捉えていたと考えられる。三木は自ら生きている「現実」、言い換えれば生きている環境の中で人間の在り方を根底から問い、まさに「閉じた社会」と「自己」の関係から問題提起をせざるを得なかったのではないか。

人間の生活するこの世界、つまり「環境」は単に「自然環境」のみではなく、人間自身が作る世界「歴史的社会的環境」と共に、歴史的・個別的な限定の中で人間が主体としてどのように自己を形成していくのかを三木は問うているのである。

「人間の根本的規定は人間が作って作られるということである。」(『哲学入門』、全集7巻、p18)

三木はここにすべての規定をおいていると考えられる。だからこそ人間が作って作られる「環境」は最も基本的な概念である。

2 環境と主体 「適応」

人間の根本的規定は作って作られるということである。環境と主体の相互規定はどのように行われるであろうか。三木哲学は環境と主体の関わりは行為として現れるという。

環境と主体の営みは(1)適応することによって生きている。主体と環境との持続的な適応として習慣が生まれる。その規定は技術的にはどのようになされるか。(2)行為が習慣的になることによって行為の形ができてくる。主体に形ができてくるとはどのようなことか。この点を中心に考察を行う。

「人間は環境に対する適応することによって生きている。適応とは対立するもの間における均衡の関係を意味している。」(p.18)

適応とは環境と主体の相互関係における均衡である。相互規定は環境と主体の営みとして自己を形成していくことである。つまり、主体が環境から受けた刺激は主体に何らかの影響を与え、影響を受けた新たな主体が、さらに環境に働き新たな環境として

作用しあう。刺激を受け、また刺激をあたえた次の段階で均衡をとることが適応である。主体である人間は主観的に環境による刺激を受け五感をもって反応する。しかも、その反応は知性を持って主体に能動的な環境への反応を起こさせるのである。それが主観的・客観的なものとして、身体の器官という道具を使い適応していくと考えられる。知性は身体から自由になることによって自律的に環境と人間の作用的連関から作られる技術的な形によって規定される。人間の身体はすでに道具として適応している。本能であれ、知性による適応であれ、身体の構造はすでに技術的に形をつくることで環境に適応していると考えられる。そこで、主体に行為の形ができて「習慣」となる。

「習慣は自己による自己の模倣として自己の自己に対する適応であると同時に、環境に対する適応である。」(『人生論ノート』、全集第1巻、p.225)

自己自身に対する適応とは、自己が環境との関わりから新しい自己を形成していくときに、新しい自己の身体と精神の均衡が取れた状態と考えられる。

では「同時」とはどのような意味をもつのであろうか。主体が環境に働きかけて環境が変化すれば、主体も働きかける前の主体から新たになって、両者も相互に新たに作り、その関係も新たに作られているのである。そして、この関係で作られる行為は模写や模倣ではなく、創造的である。現実の「社会」という歴史的社会的環境と主体の関係から主体が環境に働きかけていくと、主体は新しい主体を形成して、歴史的社会的環境の変革が期待されるのである。

三木は人間と環境の相互規定による適応の方法は次の2点を述べている。第1は最も単純な適応の仕方は本能である。第2は本能の制限を越えるものとして技術的な知性である。適応の二方法の比較検討は、次章「行為 習慣と経験」で述べる。

行為 習慣と経験

三木哲学の中心的な概念の2つ目に「行為」概念を取り上げる。第1に三木哲学における「行為」とは何か。第2、行為として主体と環境の適応の仕方を表す「習慣と模倣」、第3に「習慣と経験」を考察する。

1 「行為」とは

一般的には行為とは「主体的な心的状態とそれに基づくダイナミズムとをもつとされる存在者の動作の中で意識的、意思的、意図的、目的などの側面を重視する際に多く用いられる概念である。」¹⁾したがって行動とは区別される。

「アリストテレスは、広く人間の知能の所産、あらゆる学問技術を見渡しながらか、そうした知能を『見ること』(theoria = 観照・観想・研究・理論)と『行うこと』(praxis = 行動・行為・実践)と『作ること』(poiesis = 製作・生産)の三つに大別し、これに応じて、当時ありえた学問技術を、三つに大別した。(中略)アリストテレスは製作技術よりも実践の学を、実践の学よりもさらに理論の学を優位に置いた。」²⁾と出はいう。

『実践学』は「行為・実践」に関する学であり人間のすることとして関心をもって追求されてきた。

「行為」について論じることは、行為をする対象が現在の状態より善い状態へと指導し改善することにあつたと考えられる。三木が「行為」について問題意識をもったことは、特に「歴史的社会的環境」の差し迫った深刻な状況にあつたためと考えられる。

「人間と環境の関係はもと行為の関係である。」(『哲学入門』、全集第7巻、p.9)

行為する人間は主体である。三木哲学における「行為」するとは主体である人間が身体をもって自己の外にある存在に働きかけることである。主体として環境の中にいる他者にいかに意識的に働きかけるかが重要である。主体として「行為」するところには「形」が生まれる。「形」は繰り返されることによって習慣となる。

2 「形」とは

「形」はどのように作られ、どのような意味をもつのであろうか。「形」とは環境と主体の作用的連関から作られてくる。形は外に現れるものである。

古代ギリシャのアリストテレス(Aristoteles,紀元前385-322)以来、「現象」の捉え方は大きく2つの方向に説明されてきた。一つは古代的思惟の「物概念」(= 「実体概念」)であり、もう一つは近代的思

惟の「関係概念」(= 「機能概念」・「関数概念」)である。三木はこの2つを対比し考察するところから「形概念」を構築しようとした。そこで、2つの概念をふまえて形概念に迫りたいと考える。

形概念

「古代は実体概念によって思考し、近代は関係概念或るひは機能概念(関数概念)によって思考した。新しい思考は形の思考でなければならぬ。」(『哲学入門』、全集第1巻、p.109)「形は実体であると共に关系的であり、形概念は実体概念と関係概念との統一である。」(p.117)

三木の構築しようとした「構想力の論理」における「形概念」はアリストテレスの実体概念とカントとヘーゲルによって洞察された関係概念あるいは機能概念(関数概念)を経て、その総合として築かれるものである。ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel,1770-1831)の「弁証法」は「内容の論理」である。その内容の中には主体が入っている。弁証法は元来、主体と客体との間に成立し、あるいはむしろ主観的・客観的なものの論理である。主体が入っているという点ではアリストテレスの論理をふまながらも、矛盾は一切の運動及び生命性の根源である。物は自己自身のうちに矛盾を有する限りにおいてのみ運動し、衝動と活動を有するというヘーゲルの論理が必要である。「矛盾こそ物の生命的なものであるというのが、弁証法の根本思想である。矛盾し対立しあうものは相互に否定することによって相互に媒介する。」(p.136)このように三木はアリストテレスの論理、ヘーゲルの論理を特徴付けている。

形成説は、存在を歴史的なものとして見ることに結びついてくる。歴史的世界の論理はヘーゲルの洞察のように弁証法である。弁証法とは「形の論理」でなければならない。歴史的には、一人の人間と共にその人間の形は滅んで新しい形が生まれ、一個の社会と共にその社会の形は滅んで新しい形に代わられる。形は歴史的なものとして変化し発展する。「形概念」は形成作用の一つとして、広く行為の立場から捉えることが大切である。「形概念」は単なる模写ではなく、理解を必要として構成的なところを含んでいるため関係概念のように説明され、記述される。

以上のように、形概念は実体概念と関係概念の統一である。この分析を踏まえて、さらに、三木は現代において自然科学的認識に対して歴史的認識による「形概念」から現実に生きる世界を以下のように分析して「形」とは何かを現している。

- ・自然現象は何度も繰り返すという認識であるのに対して、形は歴史的なもので、一回性のものである。時間と空間の接点はその一時点しか有り得ないのである。
- ・形とは単なる形式ではなく、内容の中から生かしているものである。歴史的なものはすべて形をもっている。自然科学は対象を意味とか、価値とかから離れて取り扱う。歴史的な対象はすべて意味とか価値と関係して考えられる。
- ・形はある形として、一般的であるが個性的なものである。自然科学の目的は法則であるのに対して、歴史的なものは個性であり、独自性を具えている。
- ・形は単に内的なものではなく、外に現れた表現的なものである。歴史的認識の目的は個性の追求ではなく、歴史の発展段階における法則として、形の変化に関わっている。歴史とは人間の歴史であり、自然は人間の歴史の舞台であると言われている。
- ・形は変化していくものである。形は主体と環境との作用的連関から作られるものとして技術的な意味を持ち、機能を組織したもの、機能を表現するものである。歴史的認識とは形の変化である。形は時間的に変化していくもの、また空間的に固定したものである。(形は)時間的であると同時に、空間的であり、生成と存在との統一である。
- ・形は特殊なものであり、一般的なものの統一である。形は一回性のものとして様々な特殊な形が存在するところは一般的である。

形の特徴は以上のように明らかになった。

主体と環境の関係から、形は時間とともに変化していく必要があり、空間的には固定して安定した状態が必要である。これは時間的および空間的に同時にその接点で作られる形である。形は主体と環境を生成し、歴史的に1回限りの独自の存在との統一である。歴史的認識は形の認識と密接な関係がある。歴史的認識は純粋に客観的にあることができず、主

体的認識でなければならない。歴史は内から主体的に認識される。従ってそこでは、知性のみではなく情意の協同が必要である。情意の協同とは主観と客観が統一されることを現している。主観と客観が二元論的に分離・対立するものではない。

「形」とは、人間が生活を営むすべてにおいて見出すことができると考えられる。生命ある存在に対して身体がもつ器官、人間自身が環境との相互作用で身につける行動様式、社会制度や文化、伝統的なものなど多くのものを現すことが考えられる。

3 「習慣」と「模倣」

「流行は横の模倣である。」「習慣は縦の模倣である。」(『人生論ノート』、全集第7巻、p.223)

模倣について「縦」と「横」の関係は何を意味しているのだろうか。それは「時間」の変化を規定していると考えられる。「時間」を限定した「横の模倣」、「時間」は時系列的な変化として「模倣」が繰り返されていくことを「縦の模倣」として現されている。この現象の捉え方は「縦と横」としてラヴェッソン(Ravaisson, 1813-1900)にもデューイにも用いられて考察されている。社会的環境に焦点を置いて、人間が行為することを現象として捉えて、現象がどのような意味をもち相互作用として機能しているのかということを明確にしている。

では、習慣は「縦の模倣」として、どのように行われているのか。習慣は自己の自己による模倣で考えられるように、一人の人間がある行動様式を持つようになる。昨日の自己が行った行動様式を今日の自己が模倣するところに、習慣ができてくる。時間の流れに順じて、縦の模倣というのである。さらに、自己の習慣が時間の流れの中で、次の世代に受け継がれていくと、さらに縦の模倣は継続される。このように自己は自己の行為を模倣することによって、習慣を身につけ、そこに習慣が生まれる。

次に、「横の模倣である流行」(p.223)とはどのようなことであるか。

流行はある空間において、或る行為が複数の人間によって同時間あるいは同時期に行なわれることである。そのような意味に捉えると流行が「横」の模倣とは社会現象をこれほどの確に表現した言葉はな

いと考えられる。縦と横の座表には、時間が明らかである。同時に行為が展開される空間を明確に限定したうえで模倣の位置づけを考えることができる。

流行と習慣は対立するものである。現在の主体とあるべき姿の主体には矛盾があり、主体と環境の相互作用によって、新しい形をもった主体を作っていくことを示している。現在の主体そのものが習慣によって形をもつ主体であるから、当然根源的な自己と矛盾するからこそ、環境として作用する流行の働きが習慣を破ることができると考えられる。この力を三木は「流行よりも容易に習慣を破りうるものはない」(p.223)と言い切っている。新しい行為がある時点で短時間に複数の多くの人々に流行として受け入れられると模倣されて、それまで当たり前に行なわれていた習慣としての行為は変化する。つまり、習慣として行なわれていた行為は中断、あるいは取り止められる。ここに「習慣を破る」流行の力が明らかである。この力は習慣が例えどれほど多くの時間をかけて築き上げられた行為でも打ち破ることができるのである。

「習慣と模倣はある意味において相反するもので、ある意味において一つのものである。」(p.223)

習慣と模倣が「相反するもの」と言い切って、「一つのもの」とは、どのような意味をもつのであろうか。習慣も模倣もどちらも環境に規定される。そこで「相反するもの」とは、模倣としては同じでも、特に流行は環境に受動的であり、習慣は環境に能動的である点が全く相反しているということができる。習慣は能動的に環境に働きかけることから結果に対する期待が明確である。模倣には最初から予測が明確ではなく漠然としている。模倣は単なる個々の行為を一連の動作としてなぞってみるのではないかと考えられる。習慣は結果を予測するという人間の意志が働き行為として持続していくものである。では、なぜ意志が働くのかというと、人間が個々の行為をする目的は人間として環境にどう反応していくかと関連している。主体の能動性が発揮されて習慣として主体の環境への働きかけが行われることが、自己を形成していくためには必要なことである。三木は環境に対して能動的に働きかけて、自己形成をしていく環境の力に着目している。人間は絶え間な

い環境との営みの中で習慣を作り、また容易に破り、さらにまた新たな習慣を作ることによって新しい自己を形成していくことができるのである。

では、習慣と模倣がある意味では「一つのもの」とは、どのような意味を持つのであろうか。三木が「一つのもの」と想定したのは、生命は形成作用であるという意味である。

「生命と同じく流行も生命の一つの形式である。生命が形成作用 Bildung であるということは、それが教育 Bildung であることを意味している」(p.223)

つまり、「ある意味」とは、習慣と模倣が「教育」であるという共通性を一つのものから見出すことができる。一人ひとりの人間の内面に本来備わっている素質を引っ張りだし、その能力を伸ばすことである。言い換えれば形成陶冶である。

習慣と模倣の違いは環境に対して能動的か受動的かという点である。習慣が自然的であるのに対して、流行は知性的であるとさえ考えることができる。ただし、流行が形として不安定で形がないとも言われるのに対して、習慣は形として安定している。その形は技術的に出来てくるものである。ところが流行にはこのような技術的な能動性が欠けている。

4 習慣と経験

(1)「経験」の概念

「現実においては、経験は何よりも主体と環境の行為的交渉として現れる。経験するとは自己が世界において出会うことであり、世界における一つの出来事である。」(全集第1巻、『哲学入門』、p.26)

経験は日常的に次々と起こってくる出来事に出会うことである。人間は生きる環境世界に行為することによって働きかけ、反応からその世界における一つの出来事として経験して知ることができる。以下に、「経験」概念を分析し、その要点を述べる。

・経験という以上、経験は経験する主体の経験であって、経験する主体を除いて他がとって変わり経験することはできないのである。

「経験はこの独立な物と独立な物とのいわば出会いである。経験論において経験が単に受動的なものと考えられたのは知識の立場に止まるためである。経験は動的な行為的な関係として出来事の意

味を有し、この根源的な意味において**歴史的**である。」(『構想力の論理』、全集第8巻、経験 p.263) これは独立したものの対立を表しそれぞれの働きかけに対して、自己の明確な変化を自己のうちに表すことができる。また、対立するところからはじめて相互関係が保たれ、適応することができる。

- ・「我々はまず経験によって知るのであって、経験は知識の重要な源泉である。」(『哲学入門』、全集第7巻、p.26)

経験こそ重要な意味がある。経験が単なる受動的な行為に留まらず、能動的に行うところから生まれる習慣を形成してできる変化である。

- ・「我々は経験によって環境に適応していく。環境に対する我々の適応は、本能的にあるいは反射的でない場合、『試みと過ち』(=「試行錯誤」

引用者)の過程を通じて行われる。この試みと過ちの過程が経験といわれる。」(p.28)

経験への適応は2つの方法に大別できる。1つは「本能と、反射による場合」、もう1つは「試みと過ちによる過程による場合」である。そして、経験は「試みと過ちの過程」で「習慣」を生み出すことができる。三木は経験と習慣を分析するにあたっては、デューイの思想に着目している。

デューイにとって「経験」(experience)とは何であったか。彼は教育を「経験の絶えざる再構成」(continuous reconstruction of experience)と定義づけた。経験させることが即教育であった。人は環境によって教育することができるのであり、社会生活は教育する力を持っている。学校という環境で「経験」することは、本来持っている能力を生き生きと引き出し、習慣化していくことによって人間形成していく過程であると主張している。経験の再構成を進めるのが思考といわれる。

- ・経験は発明する。試みと過ち過程があるからこそ正しい知識と正しい適応の仕方を発明することができる。主体と環境の相互作用によって、新しい行為の形を作ることである。形はこのように作られ技術的である。行為の形は自律性の表現である。
- ・すべての経験は実験的である。経験により試みることは、自主的に予測的に行為をすることである。

- ・経験によっては過ち、そこに経験の価値が生じる。

経験の本性は試みては過ちことである。経験は知識を活用して、結果を予見し、判断し推論して行う。過ちことは予見した結果が異なり、主体の知性が判断や推論を反省する機会になり、ここに経験の価値が見出される。

(2) 経験の過程と習慣の形成

「経験」の概念を踏まえ、経験の過程と習慣の形成がどのように関係してなされていくのか分析する。人間は環境に適応して生きている。経験は適応が「本能的、反射的に行われる場合」と「試みと過ちの過程で行われる場合」の二点から考えてみよう。

まずは、人間は環境の刺激に対して本能的あるいは反射的に反応して、環境に適応している。適応とは対立するもの間における均衡の関係を意味している。その適応の

「最も単純な仕方は本能である」(p.18)「本能はそれ自身において過ち事がない」(p.29)

本能は環境に対する適応の仕方の一つである。人間の環境に対する適応は作業的に、行為的に行われるのであり、身体の構造・機能と結びついている。身体の諸器官は道具の性質を持っており、環境の刺激に対して単に受動的ではなく適応していくのである。しかし、本能による適応には限界がある。本能が技術的であっても、身体は無限の形をとることはできないと考えられる。本能の制限を越えるものは「知性」である。知性は自律的で身体を自由に使い、身体の器官も道具としてより良く使用して、本能よりも一層よく満足させることができる。人間は知性を以って環境に適応するために、道具を作ることができる。そこに技術があって、世界を変化させ新たな環境を作りつつ自己を新たに、豊かにすることができる。次に、経験が「試みと過ちの過程」を通じて行われる点である。

「経験は主体と環境との関係として行為の立場からとらえられねばならぬ。」(p.27)

主体と環境の関係は相互作用である。経験は受動的であると同時に能動的である。我々の行為は、ある環境の刺激によって引き起こされる。それは我々の活動そのものが、我々の活動を巻き起こす環境を作るからである。主体は環境の刺激に規定される。

この経験を「試み」と「過つ」過程をそれぞれ分析して、習慣の形成について分析していこう。経験において「試み」の過程は重要な行為として位置づけることができる。

「試み」というのは自主的に、予見的に行うことである。」(p.28)

「試み」は自発的な知性が働くことでなければできない。「試み」は推論的である。知性を働かせると環境と主体との関わりの過程で、予測、見通しが持てるようになる。したがって、結果に対する期待があるから人間は試みることができる。試みは、結果に対して受動的ではなく自主的であり、予測を持つことによって行為するということである。これは行為の本質を表し、思惟にとどまらないで現実実際に實際を伴っていくことである。ただし、試みには多くが偶然的である。経験における「試み」は実験的である。三木は経験 *experience* という語と実験 *experiri* (to try) という語の語源から経験と実験は「試行する」という意味を持つという。さらに、試みて適応することができた行為は繰り返されて、「習慣」を生み出すことができる。

「試みと過ちの過程」では主体と環境との間における持続的適応として生ずる「習慣」が出来てくる。つまり、主体と環境とはお互いに他を新たに作り、両者の関係も新たに作られ、行為は循環反応として自己創造的な斉合性を持っている。また、行為の主体と環境の互いの作用が結合する成全作用は創造的総合をすることができる。創造的総合とは、新しい形を作ることである。単なる行為の模倣ではないのである。人間の身体があるがゆえに環境の刺激を受けることができる。その刺激に対してどのように行為するか試行と過ちを繰り返して行為の形が作られる。したがって、習慣を形成する主体としてまず身体ある人間が存在することが必要であると考えられる。経験から習慣が生じてくる。習慣が『第二の自然』といったのはアリストテレスである。習慣は行為に意識を高めていくと、無意識に行うかのように自然に振舞うことを表している。習慣は第一の自然の働きが有って始めて、生まれてくるものであり、「生まれた自然である。」³⁾

1) 廣松 渉、『岩波哲学・思想事典』、岩波書店、1998、

p.481

2) 出 隆、『アリストテレス哲学入門』、岩波書店、1999、p.30

3) ラヴェッソン著・野田又夫訳、『習慣論』、岩波書店、1938(2001.2 復刻版) p.50

技術

三木哲学にとって、「技術」は極めて重要な中心的な概念である。三木は技術によって何をなそうとしたのか考察することは、三木が現実に対してどのように立ち向かったかという三木の姿勢を、論理的に理解する手がかりとなるのではないかと考えられる。そこで、この章では第1、技術とは何か、第2、習慣と技術について考察していく。

1 「技術」とは

アリストテレスによれば、「すべての人間は、自然によって知ることを欲する。」¹⁾

これは理論を行為や技術よりも優位に置いていることの現れである。^(注1)

「一般的に技術は、一方で自然がなしとげないことを完成し、他方で自然のなすことを模倣する」²⁾とアリストテレスは述べている。

また、「人間は自然本性上ポリスの動物である」³⁾

アリストテレスの基本命題である。自分のもって生まれた能力を高めていくという徳の追求によって、最高善を身に付けるように自覚的に努力することが課せられている。それと同時に国家共同体をなして、その中で社会的関係を結ぶことによって始めて自己を全とうできる生物である。アリストテレスは知性的な徳の一つに技術を位置づけた。それぞれの事柄を経験するところから、普遍的な判断が生じたときに技術が生まれるのである。アリストテレスは単に感覚のみによって人間が生きているのではないことを明らかにしている。人間は「ただ生きること」にあるのではなく、「善く生きること」にある。

「人間は自然と習慣と理知の三つによって善くて有徳者になる。」⁴⁾とアリストテレスはいう。

人間が最高善を追求していくには人間が持って生まれた能力を、若い頃より正当な習慣付けによって、教育する必要があると主張していると考えられる。

人間がよく生きていく過程において、その経験から技術が生まれるとしたら、自己を形成していく教育の過程でも、技術についての視点を置き、社会的関係の中にある社会的存在の行為を考察していく必要がある。技術は形概念を基本としている。環境の作用により行為することは人間という主体が行為をすることで、技術が生まれるのである。ここに形概念との関連で技術について考察していくことにする。

「実体概念」と「関係概念」が総合されて「形概念」が明らかにしたものは何であろうか。環境における人間の行為は技術的な形である。現実の世界に起こる主体と環境の相互作用の過程でおこる適応という均衡に矛盾が生じていくとき、如何にしてその矛盾を相互に否定することで、相互に新しい関係を築いていくのかという論理の追求である。新しい適応という均衡を作る新しい行為の形を作ることから、技術的な行為が形成されてくる。そこには知識を活用すると同時に主体はどこまでも自己が自己を限定するという自律的なところが大切である。三木はここに「新しい行為の発明」の意義を見出している。

一つは、存在をどのように認識するかということであると考えられる。つまり、人間をどのように捉えるかが、環境との関係をどのように築いていくか、どのような行為によって関係づけられ、自己を形成していくことができるかということの追求にほかならない。形概念をふまえた技術の追求は人間の在り方の追求にほかならないと考えられる。三木は人間を歴史的に認識するものとして捉えた。人間のあり方を「個性」として、歴史的に環境の中で「技術」的に変化して適応していく存在として捉えた。現実には置かれた環境に適応していく人間の行為に「形」を形成することで、自己を形成して、さらに環境を形成していくことを目指したと考えられる。

形は歴史的認識によって成り立つ。したがって形の変化（transformation）が歴史の根本概念である。形が生成し発展し、また消滅するということがなければ、歴史は考えられないのである。「形」は「形」に対して「形」であるという規定をあらわす。新しい「形」は古い「形」におこる矛盾を自己否定することによって、はじめて新しい「形」が形成されていくということを現している。

「生命は自ら形として外に形を作り、物に形を与えることによって自己に形を与える。生命は形によって生き、形において死ぬ。生命は習慣によって生き、習慣によって死ぬ。死は習慣の極限である。」（『人生論ノート』、全集第1巻、p.228）

三木は習慣と生命の関係を述べている。

また、社会的環境においてはどのような技術が作られるのであろうか。芸術をはじめとして精神的文化、人間関係を反映した社会的行動様式や社会制度、社会組織にたいして政治、経済など自然技術に対して社会技術のようなものが存在している。さらに人間自身の自己に対する働きかけの技術などがあげられるであろう。そこで作られたものは人間の形として、或は社会的な形、つまり歴史的な形を現実に自分の外に表現していくことである。

三木が技術を用いて主体と環境の均衡を保つ方法を理想的に描いたとすれば、自由な人格が必然的な自然法則をもつ世界に働きかけ、その世界から自由な人格に働きかけられるという世界ではなかったか。今日の私達の生活を振り返った時、全面的に規定しているものの一つが科学である。どのように規定されているかということ、科学は一方では技術と結びついて日常生活と密着している。他方では、私達の思考方法に浸透して、それが本質の如く信じて疑いすら持たない。そして、科学的でないことは時代遅れで、根拠がなく曖昧でいい加減なことと受け止められてしまう。あるいは知らないうちに、自分自身がそう価値判断をしてしまっていることに気づかされる。人間は日常生活の中で科学の力を信じ、絶対的に期待をもってきた。その成果が今日の日常生活そのものである。しかし、地球全体の生態系、環境問題は人類の生存にかかわる問題を大きく抱え込んでいるとようやく人間が気づいたのである。

2 習慣と技術

習慣については「環境」や「模倣」、「経験」との関係で論じてきた。そこで分析された習慣の本質を振り返り、特に「技術」との関係を考察していくことにする。習慣が個人を対象に論じる場合と、社会的な慣習という視点からも、習慣と技術を考察する。

技術は主観と客観との人間と環境との統一を意味

している。三木はデューイの「習慣」概念に着目している。デューイは「習慣は技術(art)である。」⁵⁾と定義している。デューイによれば、習慣は「社会的関数・機能」(social function)であり社会の中で作られ、社会を変革する機能を果たすという。三木はこの習慣の力を人間の技術として高く評価した。習慣はあらゆる社会で機能する。デューイは、習慣について

「『人間の能力の環境的力への作業的適応』(working adaptation of personal capacities with environing forces)を可能にする1つの技術である」⁶⁾と規定している。

また、「習慣は呼吸や消化の如き生理的機能に比することができる。後者は無意識的であるに反して、前者は獲得されたものである。」⁷⁾という。

習慣は生理的機能と類似している。呼吸は肺臓に関することと同様、空気に関することである。生理的機能は人間として生命を維持する方法として、マズローの階層でいえば人間が基本的欲求として、一番基底を支えるものである。それと習慣は区別がつかないほど作用が似ているということに注目している。有機体として人間の行為はその人の意思に負うところが全てである。同様に、社会的環境の作用とその行為が結合することをふまえて習慣に関することを論じなければ意味がないであろう。

三木は習慣が技術であるということを読書の例で以下のように論じている。また、読書は個人の習慣として論じることができる。

「読書は一種の技術である。」(『如何に読書すべきか』、全集第17巻、p.255-256)

読書が「技術」になるとは、「技術」が元来行為的であることから読書するという実践が積み重ねられることである。ここに、知識と実践が技術において結びつくことになる。読書が技術となるのは、例えどのような本に出会っても、どのように読書をしていけばよいかという「普遍的な判断」が主体に成されることである。この技術は、主体という歴史的存在が時間的、空間的な接点で生み出した個別的な独自の技術である。読書をするという能動性の高まりから、自発的な行為であり自律性をもっている技術であるということができる。読書という習慣は「形」

をもち、技術として明らかになる。ここに三木が「主体化されるということは個別化されることである。それがその技術を身につけるということである。」という。すべての技術は習慣的になることによって真に技術であることができる。

社会における習慣は慣習といわれる。人間社会に固有な特徴は、模倣という慣習なしには存在し得ないということである。

「慣習においては無数の個体が互いに模倣しあふ。慣習は円環的であるといわれる。」(『構想力の論理』制度、全集第8巻、p.120)

個人の習慣においては自己が自己を模倣する。習慣は「縦の模倣」として直線的である。社会において個人と集団はどちらも人間の行為として、環境と関わりなしには考えられない。特に、ここでは「社会的環境」において、社会的経験の集積が習慣としてどのような機能を持っているかを考察しておこう。社会において多数の人間における一致、同意や約束を意味して社会的な性質を現して「制度」と言われている。そして、「制度」はある社会集団においてはそのことが「普通」であると表されて、習慣的なもの、伝統的なものとして受け継がれている。人間は社会環境との相互作用において、個人と社会が均衡状態を保っていればそこに習慣が生まれて、常識をつくり、慣習、文化、制度、社会組織などを作ることができる。社会で生活をする人間に必要なものを作り出すという意味において、習慣は客観的に統一された「形」をもつて機能する。この形を作るのは、習慣である。習慣は「第二の自然」として、第一の自然(本能)に替わるものである。社会において習慣、慣習が第二の自然として形成されることは明らかである。それを可能にするのは習慣である。

人間は技術に深く達することによって人間としても完成に近づく一方、専門に留まるのではなく超えることが必要である。専門として役割を果たすことは技術をもちいることである。技術を発揮することが、社会において機能していくことに繋がる。それは社会を形成することであり、自己を形成することにほかならない。自己が技術によって主体的行為として他者に、あるいは社会に働きかけるところに人間存在の意味をもつことができる。この人間存在こ

そ、社会的存在であり主体性を自覚していることが人間として普遍的な人格の成立を見出すことに繋がるのではないか。ここに一人ひとりの個性的な行為が創造されていくと考えられる。主体的で創造的な行為は人間として自己を形成し、人格を形成していくと言い換えることができるのではないか。

習慣は技術である。習慣によって生き、習慣の極限は死である。形は主体的で自律した自己が別の主体的で自律した他者によって、影響しあうところに新しく個性ある自己を形成すると考えられる。この過程こそ人間の価値の形成過程であると言えるのではないだろうか。つまり、自己を形成していくとは人格を形成することであり、また人間としての価値を形成していくことに繋がっている。

「技術が人間の作るものでありながら人間を超えた意味をもっているということ、即ちそれが単に人間的なものではなく世界的・歴史的意味を持っていることを示している。」(p.180)

時間の流れの中で、人間は一回性の歴史的・社会的存在として、環境との相互作用の中で成長・発達していくことが大切である。

- 1) 出 隆著、『アリストテレス入門』、岩波書店、1972、p.47
- 2) アリストテレス著・出 隆訳、『自然学』、岩波書店、第2巻
- 3) アリストテレス著・山本 光雄訳、『政治学』、岩波書店、1961、p.35
- 4) 前掲書 p.34
- 5) デューイ著・河村望訳、『人間性と行為』、人間の科学社、1995、p.29
- 6) 前掲書 p.28

終章

1 習慣の力 第二の自然

「環境」「行為」「技術」の概念を通していえることは、三木哲学は人間及び人間の存在する環境を歴史的な存在として根底から捉える深い洞察を行っているということである。

三木哲学を手がかりに、人間と環境の関わりとその行為の意味するところを考察してきた。その行為は人間の意志が働き、行為の形を作る。経験から習

慣は生まれる。しかし、習慣と経験は表裏一体の行為である。表と裏という関係はどちらが欠けても、成り立たない。そして、習慣は技術として、人間の価値の形成過程に影響していく大きな力を有していることが明らかになった。その力とはどのようなものであるか。

ラヴェッソンは、「習慣は生まれた自然であり、生む自然である。」としてアリストテレスの第二の自然について考察している。人間は経験によって適応していく。適応に至るには「試みと過ちの過程」として経験は重要である。経験は単なる繰り返しではなく、経験を重ねることによって、行為の形を形成していくことができる。この形の形成に至る過程に習慣と技術が機能することになる。習慣は模倣と同様に、教育(Bildung)として、形成作用である。この作用で新しい自己に形成された自己を自己が模倣するところに習慣が成立していく。自己の自己による持続的適応として形が形成されて、習慣は技術として新しい自己を生み出す。ここに習慣の力が出てくるのである。形は形によって形となる。人間は自己を他の人間との関わりの中で形成していくのである。歴史的な存在として自己が新しい自己に形成されて、はじめて新しい自己が無数に新しい自己となって社会を創っていくことができる。この時初めて、社会を新しい社会に変革することができる。ここに三木の主張のひとつがあった。

習慣は個人にも社会全体にも作用することができる。習慣は技術として働く以上、能動性が高まって受動性が減じることによってバランスが取れる。さらに、習慣は試みるという過去と未来に関係づけられている経験の性質上、自発的な知性が働くことである。また、習慣は環境に規定されながら行為として実践することに意味をなす。習慣は自発的な知性と実践によって、自己を変革し、さらには社会を変革していく力を持っている。人間形成に習慣の力が大きく影響することは明らかである。

2 人間の絆 拘束と自由

我々は人々の様々な絆のもとに生きて死ぬ存在である。人の絆の下で生れ育ち、絆を織り成す、人間の世界である。それは、人の絆のもとに繰り返され

れる人間の体験である。人間は絆のもとで支えられていると同時に拘束されている存在として、生きてあることによって価値創造的な存在である。そこで、規定されるのが「体験の事実」である。人間は社会によって創られる存在であり、社会を創り出す存在である。人間と社会の中で人々とともに生きる存在である以上、常に人間と社会の関わりと社会の仕組み、人々の絆の仕組みを捉え直していくことが大切である。人々の絆の拘束性とそこから解放された自由のあり方は、人間として社会を創る存在の責任において追求されることが大きな課題であることを三木哲学から学ばなければならない。拘束の事実やその姿は見据えなければならない、一方、解放と自由の意味を見失うことは不安と強固な拘束に逃走していくことに繋がってしまうからである。

3 個性について 人間の価値の形成

三木は人間を歴史的社会的存在として捉えた。この歴史的認識では人間を一人ひとり個性ある存在として捉えることができる。それはこの世に存在する一回きりの、かけがえのない存在である。この人間の経験は体験事実そのものがかけがえのない体験である。それは自己の経験として、人間の価値の形成に影響していくことは当然である。

しかし、我々は日常生活の中で、体験として特別の行為をしているわけではない。抽象的に語ることもなく、人それぞれが食事をしたり、入浴したり、家族として会話をしている。学校や会社で体験すること、電車に乗るなど日常の生活である。ここには広い意味での人と人との関わりがある。日常的にその時におかれた環境条件の関係で自己が均衡を保つと習慣になっていくのである。さらに、人間が体験する行為は、日常生活の様々な出来事が生活世界全体をとおして意味づけられ、一つ一つの出来事が大切な積み重ねとなっていく。生活世界が有機的な関係であることが大切である。一回一回の食事が大切になり、会話が大切になりそれが習慣になって望ましい方向に自己を形成することができればその意味は生かされる。意味づけをする内容がある行動様式、生き方を良しとする態度として価値と言い換えることができるのではないかと考える。

ここに三木が人間は環境を形成することで自己を形成していくという考えを表現していると考ええる。この自己形成に習慣の力が作用して、人間の価値の形成過程を築いていくことができる。生活世界の日常の出来事から人間として良しとする、人間と人間の関係において良しとする価値の形成が積み重ねられることが大切である。現実から逃避することなく積極的に関わっていく人間としての真摯な姿勢は、三木の経験から生み出されるヒューマニズムに裏付けられていると考える。

(注1)この句はアリストテレス『形而上学』第1巻、巻頭の有名な句である。

参考文献

1. 宮川 透、『三木清』、東京大学出版会、1958
2. 久野 収、鶴見俊輔、『現代日本の思想』、岩波新書、1956
3. 唐木順三、『三木清』、筑摩書房、1966
4. 荒川幾男、『三木清』、紀伊国屋書店、1968
5. 佐々木健、『三木清の世界』、第三文明社、1987
6. 三木清、内田弘編・解説、『三木清エッセンス』、こぶし文庫、2000
7. 丸山真男、『日本の思想』、岩波新書、1961
8. カント著・篠田英雄訳、『道徳形而上学言論』、岩波文庫、1960
9. 山田英世、『J・デューイ』、清水書院、1966
10. アリストテレス著・高田三郎訳、『ニコマコス倫理学』、岩波文庫、1971
11. 夏目漱石、『文学評論』、講談社学術文庫、1976
12. ラヒェッソン著、野田又夫訳、『習慣論』、岩波書店、1938(2001.2 復刻版)
13. 岩崎武雄、『カントからヘーゲルへ』、東京大学出版会、1977
14. 岩崎武雄編集、『ヘーゲル』、世界の名著 44、中央公論新社、1978
15. 大槻春彦編集、『ロック ヒューム』、世界の名著 32、中央公論新社、1980
16. アダム・スミス著・佐々木健訳、『哲学・技術・想像力』、勁草書房、1994
17. D・ヒューム著・木曾好能訳、『人間本性論』、法

18. 政大学出版会、1995

19. J・デューイ著・河村望訳、『人間性と行為』、人間の科学社、1995